

日本社会に対する日本人としての省察を基礎とした日本改造・変革を目的論として持ち得ずにいることは、方法論的に見て重大な欠落を意味している。

むろんここには日本社会に対する日本人としての目的論的価値判断を、研究対象としての中国社会に対する認識にどのように結びつけるのか、という方法的問題がある。この問題の根底にはエドワード・サイードが1978年に提起し批判したオリエンタリズムの問題が深く関係している。ここではとり敢えず方法論的に最低限言っておかねばならない点について以下に述べておくことにする。

(3) オリエンタリズムと研究の「客観性」

サイードが提起したオリエンタリズムの問題は、18世紀末の世界近代史の幕開け以来、オリエンタ（東洋）のみならずオクシデント（西洋）をも呪縛し続け、今日に至った科学認識の陥穽として学界に大きな衝撃をもたらした³⁶。オリエンタリズムの登場が近代の幕開けとほぼ同時だったことは、科学方法論にとって象徴的な意味を持っている。

既述のように近代科学の成立を契機に研究者が自身の目的論的価値判断にしたがって研究対象を再構成しようとする一方向的（unilateral）な意図を持つに至り、逆に研究対象の側から研究者に向かってなされる働きかけは、科学実験室がそうであるように意識的防壁（shield）によって遮断されるという科学方法論が支配的になるに至った。ここでは明らかに研究者（主体）が研究対象（客体）に対して優越的地位に置かれている。

オリエンタリズムの世界認識は基本的に西洋（オクシデント）を東洋（オリエンタ）に対して優越的地位に置くが、それは近代科学の世界認識の方法が西洋をして近代科学の主体の地位に置き、東洋を客体の地位に置いた結果と云い得るのである。それゆえここでは当然、西洋世界に「東

洋学」という東洋世界それ自体を研究対象とした研究領域が誕生することになった。

むろん事実としては、研究対象（客体としての東洋）の側から研究者（主体としての西洋）に対してなされる意志的働きかけが完全に遮断されることはあり得ない。つまり研究者と研究対象の間には、双方向的（bilateral）な意志的働きかけが存在するのが通常であり、とりわけ人文・社会科学においてはそう言い得るからである。オリエンタリズムに即して言えば、確かに西洋は東洋をみずからの目的論的価値判断に基づいて再構成しようとし、その際東洋の側からの西洋に対する働きかけを捨象する傾向を強めた。そこにオリエンタリズムが生まれた根拠もあったのである。

オリエンタリズムの観念の下で、西洋は東洋を植民地として認識し再構成することを通して、西洋としての自己認識（西洋という観念）を確立した。この自己認識には世界を再構成しようとする西洋自身の目的論的価値意識の自覚も含まれる。この意味ではオリエンタリズムにあっても、西洋という観念は東洋の存在が認識されるまでは存在しなかったと云い得るのである。これと全く同様に東洋にとっても東洋としての自己意識（東洋という観念）は西洋の存在が意識されて初めて存在するようになったのである。

オリエンタリズムの問題は、西洋が持つ世界再構成の目的論的価値意識自体にあるのではない。いかなる世界認識も、その人間の置かれた存在の時間的また空間的な制約を蒙って目的論的価値意識（意識の存在被拘束性）を持つのであり、そのこと自体で、その世界認識が「客観性」を欠く根拠とはならないことはすでに述べた。認識の「客観性」はあくまで目的論と因果論の混同の克服によってのみ獲得しうるからである。

オリエンタリズムの問題は、その観念の下で主体化した西洋が客体化した東洋に対して優越的地位を保ち、それゆえに事実として存在する東西世界間の双方向的な変容過程を看過する点にこそ見

出される。

東洋は西洋の出現によって自己の世界の変容を迫られたが、同時に西洋も東洋の発見によってその世界を変容させたのである。その際当然、東洋の世界認識が変容を蒙っただけでなく、西洋の世界認識も変容を迫られた。この東洋・西洋の「世界と世界認識」の変容は相互間の、機械的には切り離し得ない強固な有機的な結合によって生じた。この有機的な結合の中から、東洋・西洋が相互に有し合う「共同主観性」とも呼び得る相互意識作用の持続性が誕生したのである³⁷。

オリエンタリズムの観念に生じたこの「共同主観性」は、当然ある種の差別・抑圧（被差別・被抑圧）を含む意識構造として存在する。西洋と東洋は始めから西洋、東洋として「先天的」に存在したのではなく、あくまで東西の支配・被支配（侵略・被侵略）の接触を通してこの「共同主観性」の差別的意識構造が成立するとともに西洋、東洋として「後天的」に「作られた」のである。

具体的歴史過程としては、西洋みずからが西洋としての観念を持ちうるようになったのは、あくまで（14世紀のマルコ・ポーロの「東方見聞録」を経て15世紀末から16世紀にかけての大航海時代のコロンブス、バスコ・ダ・ガマ、マゼランらによる）東洋の存在の発見と、その後の植民地経営を通して、東洋から持ち帰られた新奇な諸事物と旅行記のたぐい、さらに主に奴隷交易や移民による労働力としての人間の流入を介してであった。

逆に東洋が東洋としての観念を持ちうるようになったのも、この不幸な東西間の差別抑圧的関係の相互作用を通じてだったのである。

この点は男女間の性差論の中で用いられる「セックスとジェンダー」の概念枠組みと同等の構図から考えると分かりやすい。

ボーボワールは1949年の代表作「第二の性」の中で、「女は女として生まれるのではなく、女として作られる」と述べた³⁸。ここでは生理的、

生物学的に「男」と区別される「女」と、この区別に社会的文化的な意味付けを与えることによって他律的に差別されるものとして作られる「女」とが概念的に区分けされている。前者の「女」はいわば「セックス」としての「女」であり、後者の「女」はのち1980年代に、I・イリイチなどによって「ジェンダー」として定義されるようになった「女」である³⁹。むろんここでは「男と女」の共同的な相互関係性（共同主観性）が成立することで「ジェンダー」は作られる。すなわち「女」だけでなく「男」も、「女」との「対的」な関係意識なしには「男」として存在し得ないのである⁴⁰。

この男女の「対的」な関係意識の中で、「女」が差別される過程は、ボーボワールによれば「女」が「男」たちから〈他者〉として、客体のように生きることを強いられることによって作り出されるという⁴¹。

決定的なことは「主体」が「客体」に対して意志的に働きかけうる存在なのに比べて、「客体」は「主体」に対して意志的に働きかけることができない、あるいは意志的に働きかけることを許してはならない存在と見なされる点にあり、「主体」化した側の「客体」化された側に対する優越性もまさにこの点に発するのである。

ここで重要な点は、「性」をめぐる「ジェンダー」に発生する男女間の「差別的」な「共同主観性」は、意識の外側から加えられる強制力によって維持・定着するのではなく、むしろこの「差別」を男女間で相互に意識内面において了解しあう（相互了解性）ことによって初めて継続的に維持・定着するという点である。

以上の「ジェンダー」とほぼ同質の構造は、オリエンタリズムの構造にも明瞭に見られると言わねばならない。すなわち西洋・東洋の相互間に存在する「共同主観性」に由来した差別的な意識構造は、単なる政治的・軍事的な強制力によって維持され得たのではなく、むしろ西洋・東洋間の「相

互了解性」によってこそ維持されてきたということである。

日本の現代中国学の世界において、以上のようなオリエンタリズムの意識構造は、明治近代以来とくに20世紀以後、今日に至るまで厳然として存在し続けている。

(4) 現代中国学とオリエンタリズム

前述の竹内の「(日本人としての) 自分のほうに問題がなくて、ただ(中国に)行ったって、何も見えるものではない」という主張は、実は日中間にこのオリエンタリズムの差別の構造を含む「共同主観性」が存在することを自覚するがために提起されたものと言えた。すなわち竹内の方法は、いわば「現在の日本の中に現代の中国を見よう」とするものであり、逆に言えば「現代の中国の中に現在の日本を見よう」とするものとも言えたのである。

このように日本をして中国を映す鏡に代え、中国をして日本を映す鏡に代えるという方法が有効に成り立つゆえんは、言うまでもなく日本と中国の相互関係が、いわば「共同主観性」の構造によって成立しているためである。そしてこの「共同主観性」のゆえに、日本と中国の両国の「世界と世界意識」はともに両国の官民の間の相互意志によって変容を迫られてきたのである。たとえば日本の戦後の歩みは中国の戦後の歩みと密接不可分なものとして進行した。現に日本の戦後がアメリカの中国封じ込め政策から多大の恩恵を蒙った事実を否定する者はいないだろう。戦後日本の意志が戦災復興と安全保障の両面でアメリカに追随する道を選んだとすれば、それはまた中華人民共和国との敵対を選ぶ道でもあったのである。それゆえに日本人の中国研究者が日本の戦後の歩みに対するみずからの洞察を欠く場合には、中国の戦後の歩みに対する本質的理解も得ることは難しいということにもなるのである。むしろその逆に中国の戦後の歩みに対する洞察を通して、日本の戦後

の歩みに対する本質的理解を求める道も可能になる。

溝口雄三が竹内好を評して、「中国に仮託して実は日本を語ろうとした」と述べる時、この溝口の竹内評は実際には竹内の方法論が、相手の内に自分の姿を映す鏡を見るような「共同主観性」の構造が日中両国間に成立することを踏まえた方法である点を示唆するものでもあったのだ。

問題はこの鏡に映し出される日本像、中国像が「歪み」を持つという点にある。すなわち日中両国を相互に結ぶ「共同主観性」の構造の中に、認識の「客観性」を妨げる「歪み」が含まれるのである。「歪み」はまずは日本人の大半が、みずからの戦後の歩みが中国の戦後の歩みと深く結びついている現実を「見ない」か、「見ることができない」ことから生じている。

「歪み」をもたらした要因の第一は、日本人がアジア・アフリカ世界を評価するときの歴史観として、一国の歩みが何よりもまず自国内の諸条件、諸要因によって決定されるといういわば「一国自律発展論」的歴史観に強く傾斜していることを上げうる。この「一国自律発展論」は、その表現からも分かるように、日本と途上諸国との間に現実に存在する「共同主観性」の構造を見ようとしないうちにその特徴がある。

この「一国自律発展論」からは、以下のような日本近代史の評価と途上諸国近代史の評価が現れやすい。すなわち明治維新以後の日本は、一方で日本古来の伝統をよく生かしつつ、西洋近代の文明を自国に取り込む欧化政策に積極的に取り組み、それゆえに近代化に成功した。その意味で日本は近代化に成功する内発的自律的な諸条件たとえば殖産興業や基礎教育の普及に主体的に取り組む意欲、開明的精神というものを備えていた。他方、中国を筆頭とするアジア・アフリカ世界は伝統に固執する余り欧化政策に破綻し、近代化に立ち遅れた。すなわち彼らには近代化に求められる内発的、主体的諸条件が欠如していたからである。